



誌季
能古博物館だより

能古島の環境変化 (三)

九州大学生物研究部 有志

□ 能古島において 注目すべき植物

ここでは、能古島に生育する植物の中で、福岡県でもその希少性が認められ、注目すべき植物をごく一部ですが取り上げ、紹介したいと思います。

● ヒロハハナヤスリ

Ophioglossum vulgatum L.

シダ植物の一種でハナヤスリ科の多年草です。胞子葉(上写真)の形が鑢ヤスリに似ている為、この名前があります。福岡県植物目録1(筒井、一九八八)によると、県内では平地から山地にかけて稀に分布するとされ、九箇所の自生地と十本の標本記録が掲載されています。福岡市内では南公園で一九六八年の記録があるのみで、能古島においては初記録、新産地となります。植物自体が生長しても約5cm位と小さく、そのうえ、地上部が姿を現すのは春から夏の短い間だけに限られる為、発見しにくい種です。

● ナガサキシダ *Dryopteris sieboldii*

(*Van Houtte ex Mett.*) Kuntze

オシダ科の常緑多年草です。竹林の林床に四株が点々と生育しているのを確認しました。この場所は最近まで放棄されていたモウソウチク林でしたが、観光農園の開発に伴い、今後は適切に管理された竹林として維持されていくようです。能古島ではこのナガサキシダとともに、同じ竹林でのみ確認されているヤマイヌワラビも一株だけですが生育しているため、竹林とその林床植物の今後の動態が気になります。

● ハマビシ *Tribulus terrestris* L.

海岸の砂地に生育するハマビシ科の一年草または越年草です。福岡県RDBによると、能古島(一九八九年)、玄海町(一九三三年、一九六五年)から三点の標本記録だけが残っています。すでに能古島では一九九四年に絶滅したとさ

れており、最後に確認された記録が唯一能古島だったことを考えると非常に残念でなりません。

●シハイスマイレ *Viola violacea Makino*

県内では比較的山地に生育するスマイレ科の多年草です。能古島では二〇〇〇年に一個体のみ、中央部の道路沿いの林縁において確認されていますが、二〇〇二年以降は個体が消失して確認されていません。スギ植林内や林縁、林道沿いなどに生育する植物ですが、消失したとは言え、島嶼部で生育が確認されたことは特筆に値します。現在、能古島には他にタチツボスマイレ、コタチツボスマイレ、ナガバナタチツボスマイレ、ニオイタチツボスマイレ、ニヨイスミレ、スマイレ、ヒメスマイレ、コスミレ、ノジスマイレの九種類のスマイレが生育しています。スマイレと一口に言っても実は種類も多く、花や葉の色、形は全て違ってきます。

それぞれ種が違った環境に生えているため、春はスマイレを探して島内探検をするのも面白いですよ！

●ハズコウジュ *Salvia plebeia R.Br.*

湿地に生育するシソ科の越年草です。能古島小・中学校近くの杉谷池に三十株ほどまわって見ることが出来ます。また、南部の水田にも十株ほど確認しました。生育には湿地性の環境が維持されることが大切であり、

「潮間帯」のような、水位の季節変動が重要だと考えられます。しかし残念なことに、近年能古島では池の改修工事が進んでおり、西谷上池や西谷下池は護岸の一部がゴムのシートで覆われてしまいました。このような手法はミゾコウジュをはじめ、湿地性の貴重な植物の生育場所を完全に奪うものであり、今後は是非とも植物に配慮のある工法が用いられることを望みます。

●カワチンヤ *Veronica undulate Wall.*

湿地に生育するゴマノハグサ科の越年草で福岡県RDBでは準絶滅危惧種に指定されています。能古島では春先に水田などで見ることが出来ます。個体数も比較的多く、極端な農薬の使用や水田の放棄がない限り、能古島では絶滅する恐れはないと考えられます。

●ミクリ *Sparanium erectum L.*

湿地に生育するミクリ科の多年草で、福岡県RDBでは絶滅危惧ⅠA類に指定されています。西日本、特に九州では稀な植物であります。これまで行橋市と田川市にのみ分布情報があります。しかし、今回の調査で能古島においてもその生育が初めて確認され、福岡県では三箇所目の自生地となりました。南部の住宅近くの休耕田で育っており、両側の田んぼでは毎年稲作が行われています。地下茎が匍匐して栄養繁殖をするため、正確な個体数は不

明ですが、約5mに三十株ほどが生育していました。福岡県における数少ない自生地のひとつである為、大切に守っていききたいものです。

今回、注目すべき貴重な種をいくつか紹介しましたが、これらの種のほとんどは人の影響が及ぶ地域（水田、休耕田、林縁など）に生育しています。こうした環境は昔から続く一連の農作業によって維持されており、この穏やかな攪乱がその種を存続させていると思われまます。ところが近年、能古島でも耕作地の放棄をはじめとする里山環境の荒廃、改修工事による湿地環境の変化など、しだいに目にするようになりました。そうした事は植物の生育できる場所自体を失うものであり、追いやられた植物は能古島に存在すること自体が難しくなってしまうのではと心配されています。一方、山地性の種は個体数こそ少ないのですが、年間を通して安定した環境に生育しているため、大規模な開発さえ行わなければ絶滅することはないと思われまます。一度絶滅してしまった種は二度と蘇ることはありません。また、能古島で絶滅した種は他の地域から持ち込めばよいという問題でもありません。これまでの長い歴史の中で移り住み、根を下ろしてきた植物は、能古島で培ってきた遺伝子を有しており、何物にも代えがたいものなのです。



シハイスマシレ *Viola violacea* Makino
県内では比較的山地に生育するスマシレ科の多年草。この写真を撮影した翌年以降、シハイスマシレの姿を見ていない。(2000年撮影)



ナガサキシダ *Dryopteris sieboldii*
葉が厚く形も特徴的なシダ植物。福岡県全土に分布するが個体数は少ない。能古島では現在竹林の1ヶ所に4株のみ確認している。(2006.12.10撮影)

能古島は、福岡都心部に近いにもかかわらず、島という特殊性と、他では見られない里山環境により、豊かな自然環境を織り成している島です。一人一人が植物に少しでも目を向け、これら多種多様な植物たちの存在をまづは知ることが大切です。そうすれば、おのずとこの自然環境が大切に守られ、今後とも受け継がれていくことでしよう。

※福岡県RDB

福岡県が、県内で絶滅の恐れがある野生生物種について、それらの生息状況等をとりとめたものです。

植物相調査担当…田金秀一郎 遠山弘法
※次回は「能古島のトンボ相」です。



シュンラン *Cymbidium goeringii* (Rchb. f.) Rchb. f.
ラン科の多年草。「春蘭」という名の通り、春を代表する植物で、能古島では明るい林や林縁に生育している。(2006.4.17撮影)



ミクリ *Sparganium erectum* L.
湿地に生育するミクリ科の多年草。福岡県内では非常に稀で絶滅が危惧されている。来歴は不明だが、能古島では休耕田に30株前後が生育している。(2006.8.23撮影)



カワチシャ *Veronica undulata* Wall.
湿り気のある所に生えるゴマノハグサ科の二年草。和名の由来は川辺に生えるチシャという意味で、若葉はやわらかく食用となる。(2006.4.17撮影)



ミソコウジュ *Salvia plebeia* R. Br.
湿り気のある所に生えるシソ科の二年草。ロゼット状の根生葉で冬を越し、春に花茎が伸びて花を咲かせる。(2000年撮影)

甘棠館と自宅の罹災は寛政十(二七九八)年、二月朔日。少棠の誕生は、火災後わずか十八日目の二月十九日、同じ年の出来事です。ぜひ、南冥と孫、少棠の墨竹図の展示(五月十八日から)を御高覧下さい。

容赦なく襲いかかる、甘棠館と自宅の火災。永年研鑽を重ねてきた著書の殆んどは、この罹災で失われます。失意の底で、初めて筆を取り描いたのは、日付を入れた墨竹です。日が過ぎてゆくに従って、墨竹は力強く蘇っていきます。その画の意味を解っているのでしょうか。南冥の孫である少棠も、墨竹を多く描いています。しなやかな竹、風に立ち向かう力強い竹、扇面に描く瑞瑞しい竹、と変化に富んでいます。

南冥にとつて、未だ謹慎が解かれない身に
五月十八日(金)から展示致します。

大庭卓也氏が「南冥の墨竹」と題して、墨竹図の横に書かれている日付についての貴稿を、本誌四頁から五頁に掲載させていただいていきます。また、その内容に合わせ、大庭氏所蔵の墨竹図と当館の南冥、少棠の墨竹図を併せて、**五月十八日(金)**から展示致します。

事務局だより
——墨竹図の謎
南冥から少棠へ——

「墨竹図の謎、南冥から少棠へ(仮称)」を展示致します。

五月十八日(金)から常設展を一部入替え

亀井南冥が

描いた墨竹

福岡教育大学非常勤講師
柳川市史編纂係学芸員嘱託

大庭 卓也

亀井少榊が絵事をよくし、特に墨竹を得意としていたことは、『閨秀亀井少榊伝』に収録される、能古博物館亀陽文庫所蔵の優品の数々によっても知られよう。しかし、その祖父、亀井南冥も、墨竹をしばしば好んで描いていた点は、これまで紹介したものを知らない。

私は、田能村竹田の『竹田莊師友画録』(二卷 天保四年成)の一節に、

南冥先生、…(中略)…晩写墨竹。予觀

二紙。劍拔弩張、英氣溢出紙表。題字亦

多豪語。其一旁書曰、第二十一、其二曰、

第四十六。不知何謂也。

(南冥先生は…(中略)…晩年、竹を写

していた。私は先生の竹の絵を二つ拝

見したが、いずれも、劍を抜き弩をひ

くように、紙から溢れでんばかりの勢

いであつた。また題賛も威勢のよい言

葉が多い。端の方には、「第二十一」あ

るいは「第四十六」と記してあつて、

何の意味か分からないでいる。)

とあるのを読んで、以前より注目していたが、ここ数年の間、偶然にも南冥の墨竹図三点を架蔵する機会に恵まれ、その特色が少しずつ

解ってきたので、ここに報告しておきたい。その一は、縦44・2cm、横66・4cmの紙本、印章二顆、ともに白文方印「亀井／魯」「道哉／父」を捺す。中央に大きく余白を残し、円を描くように一枝を画面の外にまで伸ばした構図は、竹田のいう通りとても勢いがよい(図-a)。左上には「戊午仲春災後第二十有九写於静好堂」とあり、寛政一〇年二月、すな



<図-a> 南冥墨竹図
罹災後二十九日目筆(筆者蔵)

わち甘棠館が焼失し、居宅書齋のすべてを失った時に描いたものと知られる。とすれば、「災後第二十有九」とは、甘棠館焼失から二九日目という意味である。ならば、竹田が疑問に思っていた「第二十一」「第四十六」との端

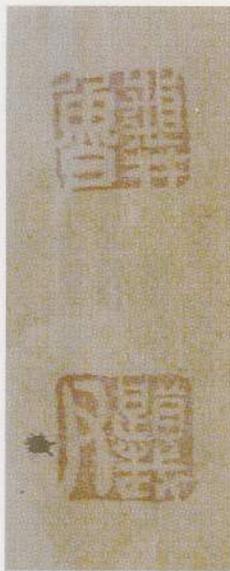
書きも、焼失から数えた日数を記したものであったということになる。南冥は失意のうち、火災のことを思い返しながら、時折、竹を写しては気を紛らわしていたのである。竹の節や葉に見られる、激昂したかのような



<図-a> 印影部分

筆致は、みずからを鼓舞しているかのようなもある。すなわち、南冥の墨竹図は、甘棠館火災後何日目に描いたという日付を持つている点に特色があるということになる。

その二は、縦39・5cm、横56・0cmの紙本、印章はaと同じ印文だが、印影の異なる白文方印二顆を捺す。左に「南冥陳人災後一百三十有三画於苞楼戊午九月」とあり、これは同じく寛政一〇年の九月、火災から一三三日目に描かれたもの。まっすぐに伸びる竹は落ち着いており、心の平静をやや取り戻したことを示している(図-b)。



<図-b> 印影部分



<図-c> 南冥墨竹図
晩年頃筆か (筆者蔵)

その三は、縦40・0cm、横49・1cmの紙本、印章はaと同じ二顆のほか、なかほどに白文長方印「日堂」を捺す。署名、火災後



<図-b> 南冥墨竹図
罹災後百三十三日目筆 (筆者蔵)

〔図e〕は、素っ気なく「第三百有四十二画」とのみ記し、朱文連印「南」「冥」が捺される扇面の墨竹。上弦52・2cm、下弦21・8cm、天地18・1cm、紙本。罹災してから、ほとんど一年を経た染筆であるが、これ



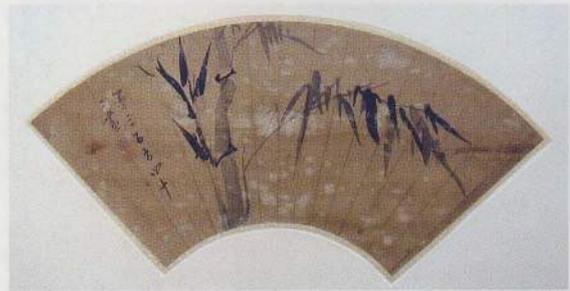
<図-d> 南冥墨竹図
罹災後十五日目筆

何日という記述はないが、息子の昭陽による八言二句の着賛がある(図c)。曲線を惜しんだ描法は、亀井流の書体にも通じて、すっかり堂に入った感がある。また昭陽の賛に支えられている画面よりして、あるいは最晩年の作と見ておきたい。

以上三点を、当館事務局長菊地幸子氏にお話ししたところ、亀陽文庫所蔵の南冥墨竹二点をお教え頂いた。(図d)は、「戊午仲春災後一十五写」とあり、はたして、罹災してから、わずか一五日目に描かれたものである。縦80・8cm、横22・9cm、紙本。印章はaに同じ。節も葉も、なんと弱々しい運筆の竹であろうか。それは、南冥の落胆の大きさをそのまま示すもので観るに痛ましい。

以前に南冥は、焼失した甘棠館のことを思いやりながら、いつたいどの位多くの竹を写し続けていただろうか。これら五つの墨竹を順に並べてみると、失意のうちから徐々に平静を取り戻してゆく、南冥の強靱な精神力を読み取る事ができよう。

南冥の墨竹は、文人画一般の墨竹とは同列に



<図-e> 南冥墨竹図
罹災後三百四十二日目筆

扱えぬ、悲哀に満ちた物語がその背後にひそむ。また少槩が、静かに竹を写す、こうした祖父の姿を身近に見ていたとすれば——彼女がこだわって墨竹を描き続けた理由も、おのずから理解されるであろう。

※次号は「南冥と鎮西の漢詩人(五)

南冥と広瀬淡窓」です。

